

をなり神としての女性

— 人間模様に見る絆・柴門ふみの作品から —

A female as a guardian goddess (Onari-Gami) for male

春日井 真 英*

Shinei KASUGAI

キーワード：をなり神、伊波普猷、沖縄、与謝野晶子

Key words : Onari-Gami, Iba Huyu, Okinawa, Yosano Akiko

要約

「をなり神」これは、古来より女性はオトコを霊的に守る存在と見る考えである。この考え方は沖縄学の父とも言われる伊波普猷の調査研究から紹介されたものである。そしてこの思考様式は古代日本と琉球諸島の文化を繋ぐ概念として知られている。筆者は、マンガの世界にもこの種の女性観があることに気がついた。ここでは柴門ふみの一連のマンガに描かれている男女の関係が、一般的な男女の関係ではなく女性が蔭ながらオトコを護る存在として描かれていることを指摘しようとするものである。柴門の描く諸々の作品を通して、彼女のもつ男性観、女性観を考えて行こうとするものである。

Abstract

The female supposed as a male guardian on idea was named ONARI-Gami (をなり神) around Okinawa-Isles, these ancient idea was introduced by Iba Huyu (伊波普猷), who is very eminent scholar of Okinawa-culture about hundred years ago. In this paper, the author tries to describe about Onari-Gami (をなり神) idea, an old episode told in Kojiki (『古事記』) such as birth of Ugayahukiaezuno-mikoto (鵜葺草葺不合命) and his nunny, the aunt Tamayori-hime (玉依毘賣) and also the story of Sahohiko (狭穂彦) and Sahohime (狭穂姫) in Nihonsyoki (日本書紀) in the 5th years of Suinin-Emperol (垂仁天皇 五年の条). Not only in our history we can find such Onarigami -mentalities in the Poem of Yosano Akiko (与謝野晶子), her famous poem 「ああ、弟よ君をなく 君死に給う事なかれ」. Some may disagree with me, but if one analyses her poem with the idea of Onarigami, they will be sure to agree with me. And in the present day, even in Manga,

* 東海学園大学人文学部人文学科

written by Saimon Humi (柴門ふみ), author can point out the mentalities of Onarigami-mind

(I) 女が男を思うこと

(II) 「オナリ神」を考える

(III) 異性との出会い

あるいは好きな人の発見

(IV) 自立する女

あるいは男の女々しさ

(V) 柴門の作品に描かれる「オナリ神的」女性とは

(I) 女が男を思うこと

君死にたまふことなかれ

(旅順の攻圍軍にある弟宗七を歎きて)^(註-1)

あゝおとうとよ、君を泣く

君死にたまふことなかれ

末に生まれし君なれば

親のなさはまさりしも

親は刃をにぎらせて

人を殺せとをしへしや

人を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや^(註-2)

与謝野晶子のこの「君死にたまふことなかれ」という歌はよく知られ、当時の反戦歌として受け取られてもいる。だが、ここでは日露戦争の話をするつもりはない。また与謝野晶子の歌の意味を論じるつもりもない。問題にしたいのは、タイトルについた括弧内の文である。このわずか十六文字の中に与謝野晶子の「弟 宗七」への思い、その安否、生き様を叱咤しているのである。彼女の気持ちが悪人でもなく、夫でもなく、弟を思う ということの意味はこれまで、とくに考えられてきていなかったようである。たしかにこの詩が発表された時「旅順口包圍軍の中に在る弟を嘆きて」という添え書きがあり、その時代の中での、このような詩歌は国家的行動に反する

大変なスキャンダルでもあった。だが、今、この時代に身を置いて考えてみると、はたして、この添え書き故に反戦歌として見ることに抵抗が生じるのである。たしかに与謝野晶子の弟は、日露戦争の最中、旅順港をめぐる作戦に従事し、この一連の作戦で旅順は落ちたものの、日本軍は5万9千人もの死傷者を出したという。このような時代的背景、また生命の脆さ、危うさを前提にしながらも筆者は、「弟」を思うという添え書きに興味を惹かれるのは民俗を考えるものとしてなのかも知れない。それは琉球弧の島々での姉妹が兄弟を思い、守るという「おなり神」の意識を感じたからかも知れない。

(II) 「オナリ神」を考える

伊波普猷は『をなり神の島』(註-3) で『オモロ』に現われた「をなり神」を論じ、「をなり神」がその兄弟を救ったという、民間伝承を次のように紹介している。

ある晩妹が睡眠中、大きな声を立ててもがくので、一緒に寝ていた母が、なぜそんなことをするのかと、一方の手をつかまえてゆり起こしたら、惜しいことをした、二人の乗った船が今難船にあったところで、右の手で兄さんを助けて、左の手でお父さんをつかまえようとするところを、手が動かなくなって、お父さんをとうとう助けることが出来なかったと言った。程なくして、兄から難船にあって父が死んだが、自分は助かったという手紙が来て、皆々びっくりしたという。この身内を救ったという「をなり」は他家に嫁がず、家族以外のもの人には見られたことがなかったが、あるとき妹の夫に見られたというので、普天間の洞窟中に逃隠れて、後日神として祀られたという。今に至るまで、旅立つ人が普天間に参詣して、旅行の平安を祈るのは、こういうところから来た云々(註-4)。

もちろん、伊波普猷の論文には神託を受ける女性の力の指摘もある。また、故郷を離れた男子には、をなり神が終始つきまわって自分を守護してくれるという信仰があった。姉妹の項の髪の毛を乞うて守り袋に入れ、或いはその手ぬぐいを貰って旅立つ風習が、つい先頃まで首里那覇にさえ行われていた(前掲書4~5頁)。姉妹のいない場合についても従姉妹なり、誰なりのそれを貰って、お守りにしたとのことだ(前掲書5頁)。この場合、なお注目しておきたいことは海鳥が航海中に帆けたなどに止まることを縁起の良いこととしていることである(前掲書5頁)。伊波普猷は琉歌を援用して、この海鳥を白鳥と受け、白鳥(海鳥)が「をなり神」の象徴になったことは、近代のことではないと「屋良ぐわいにゃ」に、この思想が見えると指摘するのである。ここには、白鳥と船という関連性が示されてくる。ところで、伊波普猷は国語の辞書には「をなり」という語には、昼間持ち、もしくは賄女の義があるとするが、琉球語に見る姉妹の義が全然ない

(前掲書21頁)とも指摘する。そのことを「をなり神」の意識の変遷、宗教的意識の脱落に依るものとしているが、興味深い。つまり、女兄弟の男兄弟を思う気持ちの強さは恋、もしくは愛だけで説明できない側面もあることになる。『日本書紀』垂仁天皇五年の冬十月の条で狭穂彦の謀反の話^(註-5)が記されているが、その補注3の5では、狭穂彦・狭穂姫の兄妹の姿を古代日本におけるオナリ神信仰の存在と示唆している。

この、妻でもない女性が男性を守るという構造は、宮崎駿のアニメ^(註-6)にも見ることが出来る。それは村を追放されるアシタカを見送る女の子、カヤとの会話から伺いとれる。

女の子 「兄さま！」

アシタカ 「カヤ！」

アシタカ 「見送りは禁じられているのに」

女の子 「おしおきはうけます。どうかこれを。私のかわりにお伴させてください」

アシタカ 「これは？大切な玉の小刀じゃないか」

女の子 「お守りするよう息を吹きこめました。いつもいつもカヤは兄さまを思っています」

アシタカ 「わたしもだ。いつもカヤを思おう」

さりげない会話だが、傍に居れないこと、さらにアシタカが村に戻れるかという保証もないままに、村の掟に反して見送りに出て、貴重な玉の小刀をお守りとして、息を吹きかけ渡すと言うことは、呪術的に常にそばにいることを暗示する。カヤの行為には、単なる恋以上の意味が隠されていることになる。このような古代的な心情を宮崎が描こうとした目論見は何処にあったのだろうか。単なるロマンチズムなのだろうか？筆者はるか南の琉球諸島に住む人間の内面との共通性を、ここから読み取ることができるのではないかと考える。宮崎の描くアシタカとカヤの間にはこの玉の小刀を介して二人だけの「絆」が形成されていたことになる。それは、肉体を越えた精神的な物であった。筆者はすでに柴門ふみの『非婚家族』で、肉体関係を越えた形での「絆」^(註-7)の存在を読みとっている。柴門は作品の中で元妻達を、元夫の結婚式に立ち合わせながら

「あわなくても

そばにいらなくても

思い出すだけで

心の中に灯がともったような

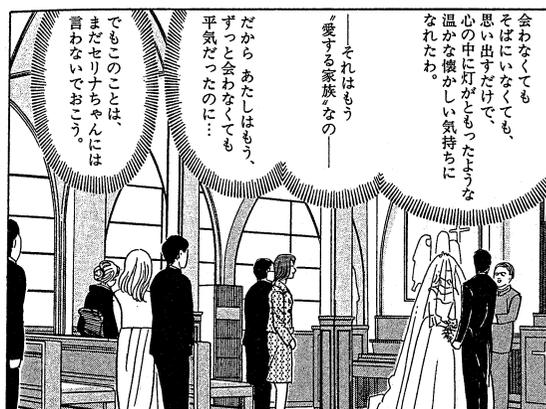
温かな懐かしい気持ちになれたわ。

-----それはもう

“愛する家族なの” -----」(註-8)

と、言わせている。

そこには、人間関係のしがらみを越えた絆が存在しているように見える。もはや、「求める」、「求められる」という関係ではなく、気持ちの中で寄り添うことのできる関係を想定させているのである。それを異



(非婚家族 四巻 266頁)

性間の友情と言うべき関係かとも考えてみた。だが、「オナリ神的な意識」という視点に立てば、そこに兄弟という関係を前提とするか、しないかということになる。それは、伊波普猷の記したように「姉妹のいないときには、従姉妹なり、誰なりのそれを貰って、お守りにした」(伊波普猷 前掲書5頁)というように共同体意識に繋がるものでもある。つまり、共同体として男性を見守るという意識である。また、それは戦時中あった「千人針」(註-9)というお守りもこれに準ずるといえる。つまり、千人の男女に依頼して行われた民俗的呪法であるのだが、多数の念力を合わせ共同体内の個人の危難に対抗する民俗的呪法が国家的事象に応用された事例として理解されていることは興味深い。

(Ⅲ) 異性との出会い

あるいは好きな人の発見

柴門の家族観がどのようなものであるのかはまだ判らない。だが、作品から社会共同体的存在としての家族が意識されていると考えられる。つまり、今のような個人主義的なエゴを捨て、共同体全体の中で男と女のあり方を、家族と考えるという意識である。『Age 35』(註-10)では、登場人物、島田英志と彼の妻、朱美の人生の中で未消化になっていた部分(とくに後半=下では妻=朱美の側の気持ちが描かれている。そして、彼女は美術大学時代の同期生の下に走る。夫の英志は役員秘書のミサの元彼=ヒデユキに似ていた事から、アプローチされ、関係を持っていく。)彼女たち二人に共通するのは過去の感情の、心の底にとどまった澱のような過去のしがらみである。その澱を忘れようと、他のものに眼を向けながら、感情を内に封じ込めながら生きようとしていたと言える。人に知られず、人に判らないように生きようすると、そこに自分たちのエゴが立ちふさがってくる。それをさらに嘘で塗り固め、そして隠そうとしていく。そこに軋みが生じる(註-11)。その軋みは、柴門の『Age 35』では英志の妻、朱美の心の動きで描かれている。だ



(Age35・下・129頁)

に燃えている火のことに気づいたのは自殺した成瀬の前妻である。

「あなたの心の中に別の女が棲んでいる」

という、言葉を残して死んだ彼女にとって好きな人とは、どういう存在だったのだろう。また、そのことを知ってからの彼女は彼にしか対峙できなかったのだろうか。十五年ものあいだ、朱美を心の中に抱きながら暮らした陶芸家の成瀬はどんなに辛かったであろう。

彼はただ黙って、待ち続けていた。見守るという行為は、朱美に何かを思い出させるのに十分だった。そして、会ったときには「食事でも」という中途半端な逢いかたを拒否され、自分の中の苦しみに対峙することが求められ、

「苦しみから逃れずに

苦しんで苦しんで

その苦しみの果てにある物をつかんでこい。

憎しみを通り抜けた者だけが、憎しみを表現する資格を持つんだ。」

といわれる。成瀬は、このために十五年

が、これが青春期の、男女の出会いで生じた些細な感情のトキメキであったことに朱美は気がついていないのである。そのトキメキによって燃えだした火のことを朱美は忘れていたのか、気がつかなかったのだ。しかし、そのトキメキを十五年の間、胸に秘めていたのが、後に一緒になる陶芸家の成瀬シンであった。心の中



(Age35・下・129頁)



(Age35・下・102頁)

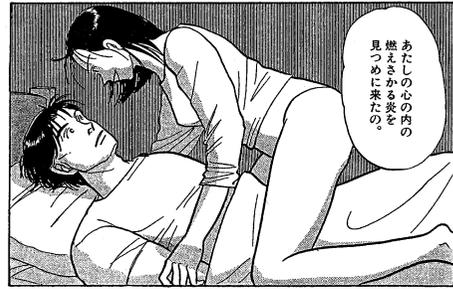
を費やしたことを告げる。

それに対して朱美は、結婚という静かな生活の中に逃れていたことに気がつく。その自分の中に潜む者がなんであったかのをはっきりさせるために、朱美はいったんは断った信楽の穴窯の「火」を見に行く。窯の煙突から立つ火柱と、火を落とし、窯の窓を封じる瞬間に渦巻く透明な熱の気流、それこそ成瀬が朱美に見せたかったものだというのだ。その言葉に応えるように朱美は、

「その炎がなんなのか確かめに来たのよ。」

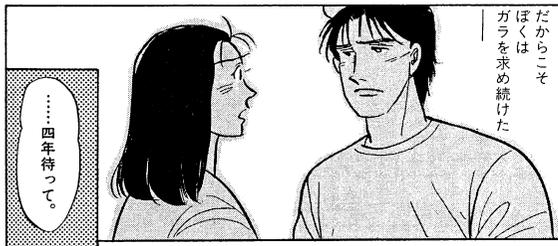
という。

成瀬は、窯の火落としの瞬間に見える熱の光 (Age35・下・174) を朱美の目から感じる、とい



(Age35・下・167頁)

い。朱美への想いを告白する。その女の眼の中の光、それを柴門は朱美に「私はまだ傷つくことに少しも慣れないし、人を想う熱い気持ちを抑えることも出来ない。」と言わせている。成瀬の求めに朱美は「・・・四年待って」(Age35・下・174) という。それは子供達が十八歳となり自立するであろうから。だが、朱美の夫、鳥田と成瀬は陶芸展で話をし、陶器の「よさ」の認識が「あ、いいな」思うところから始まり、そこから美が見えるようになるという。そして、それはあたかも結婚生活と同じようなものと言われる。しかも間違っただけならそれを捨て、改めて探さなくてはならないという。会話の中で成瀬は、鳥田のことに気がつくが、



(Age35・下・174頁)



(Age35・下・205頁)

島田は敢えて無視して立ち去る。

言葉は、人の心の中で様々に変化する。たった一つの言葉から、自分では思い至らなかった世界へと展開していくこともある。妻の朱美と「やり直したい」と願う島田が夫婦二人だけの旅に出るが、二人のモノに対する意識の違いをまざまざと感じさせられる。太陽の光、浜辺の昆布……。朱美は、問われるままに成瀬への気持ちがいつから芽生え始めていたのかと聞かれ、(Age35・下・229頁)



(Age35・下・229頁)

たぶん……あたしが生まれたその瞬間から……

出会う前から

好きだったヒト……

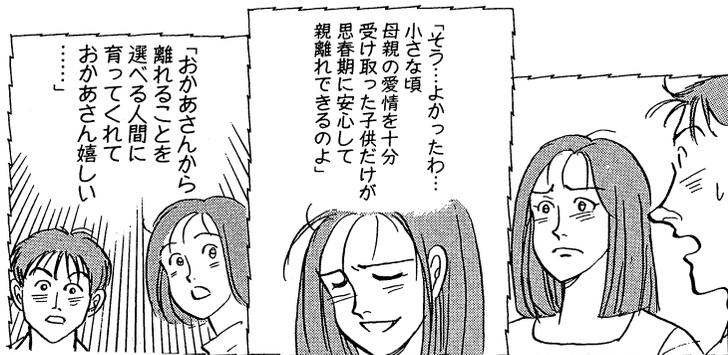
あたしの運命は彼を目指して突き進んでゆく水の流れだった。

と、答える。

時間は二人の中の根本的な違いを明確に抉りだしていく。朱美の「自分の中の寂しさに向かい合い、もう一人の寂しい人と一緒に寂しさを表現する人間になりたい。」という言葉に十四年間という結婚生活の中で島田は、自分は一体この女（朱美）の何を、知っていたのだろうかと悔やむ。そして、互いに速めに行動すること（分かれる）ことを提案する。もちろん心の中に別な人が棲んでいることがポイントになる。(Age35・下・237頁)

この言葉は、成瀬の自殺した元妻の言葉でもある。心の中に誰かが棲んでいる。棲む、という言葉の奥行きに戸惑いそうになる。「住む」ではなく「棲む」、それは公然とした存在ではないことを暗示する。このとき島田の胸の内に「ミサ」のことが甦っていたかどうかは判らない。柴門は、ただ男女の微妙な関係だけを扱っているのではない。母子の関係、その社会的関わりに眼が及んでいることは注目すべきである。そのことは、二人が離婚を決意し子供達に、どうするかを尋ねるところに集約されている。子供達が母親離れをしていくのを朱美は安心しながら自分たちの過去を振り返るのである。

マンガだから、空想の世界だから、幸せな終わり方になるのだろうか。陶芸家の成瀬の下に行く朱美、自立してアメリカに行く子供達。島田は、はからずも、子供達を飛行場に見送りに行きかかっての恋人だったミサと再会する。柴門は、このミサには何も語らせていないがやはり、ミサの中に定めのような「火」があったことを暗示している。だから、ミサに飛行機のチケットを破り捨てさせたのだろう。(Age35・下・242)



(Age35・下・242頁)

「火」のように激しい行動力を持つ女性と、「水」のように静かな女性の対比のなかで鳥田は翻弄されてきたのだろうか。いや、柴門の言いたかったのは、もっと深いところでの運命論的な出会いの存在なのかも知れない。だから、こそ我々は「人生ってわからないものね」、という言葉で片づけようとするのであろう。だが、時は心の隅の空間をいつの間にか埋めていくのだ。人の心に潜む寂しさや孤独はいつの間にか増殖するのである。それを埋めようとして、ムリをすると破綻が生じる。

そこに、家族というモノの考え方が求められてくることになる。

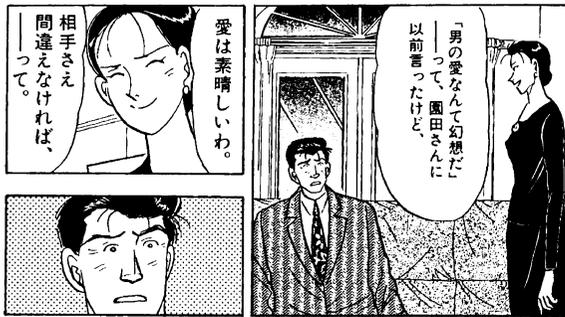
「別々に暮らしたって家族は家族さ」という『Age35』の下巻 244 頁での鳥田の言葉は今後の日本社会を考えるヒントになるかも知れないが、生きる目的を理解する人間の度量が求められてくることになる。



(Age35・下・244頁)

この「Age35」で、柴門が朱美に言させた

「出会う前から好きだったヒト」という言葉は興味深い。ここに運命論的な意識があるのだろうか。彼女の作品の中には『あすなる白書』(註-12)のなかで、



(『あすなる白書Ⅱ』263頁)

「相手さえ間違えなければ、愛は素晴らしいわ」と、言わせている。

相手を間違えない。その意味を、柴門は「わたしは・・・あたしを一人の人間として・・・丸ごと認めて愛してくれる人と結婚したいんです。」といわせている。



(『あすなる白書Ⅱ』274頁)

この言葉は、「相手を間違えたくない」と同義語なのだ。柴門ふみの作品で気がついたのは、男性主人公は、優しさ故か女々しく決断できず。女性の方がしっかりと現実を見据えているように感じることである。それは、決断できない男性が増えたことを意味しているのかも知れない。いや、決断のきっかけが判らなくなっているのかも知れない。時代の世相がマンガに収縮している。生きるために、誰かをあてにしているはずではない。中島みゆきは「北の国の習い^(註-13)」のなかで、厳しい冬の凍てついた道で立ち往生した車から、男を捨てて去るという比喩で待たない女を歌っている。黙って、誰かに救われることを良しとしない生き方が示されている。歌い出しは、

離婚の数では日本一 だってさ

大きな声じゃ言えないけどね

しかも女から口火を切ってひとりぼっちの道を選ぶ

と、北国の女の芯の強さを唄っている。

(IV) 自立する女

あるいは男の女々しさ

女性的視点からであろうか、柴門ふみに限らず、中島みゆき（歌手）もそうだが作者が女性の場合、男性はいつもどこか弱く、優柔不断な人物が描かれてくる。その最たるモノは柴門ふみの『華和家の四姉妹^(註-14)』と言える。いい加減な父親としっかりしているように見える四姉妹が織りなす世界は、女性が必ずしもしっかり者ではないことを指摘もしている。しっかり者として生きようとする背景に潜む女性は、実は弱く、男を信じる事によって、その信頼によってかろうじて成り立っているからだ。その信頼を、守ろうと生きるから、そこにしっかり者の姿が生まれるのだと言うことが四姉妹にダブらせるように母親の姿が示されてくる。

妻から三行半を突きつけられるようなだらしのない男の姿も描かれているが、それらは基本的に、外面を取り繕う男が、優しさ故に決断を下せないことを見透かしているように見える。その視点に立つと、女のしたたかな姿が見えてくることになる。年齢差のあるカップルでも柴門の描く女性は、しっかりと男性をコントロールしている。そして、そこには、やはり見えない糸のような存在を暗示させている。^(註-15)

この男と女を繋ぐ糸の絡みが人生を狂わせ、また新しい人生の扉を開けていくのだ。それが、通りがかりの人であったり、過去での関わりであったりする。

彼女の作品の中で男性を助ける妻以外の女性、しかも表立ってでの人物がある。それは、世の中の仕組みそのものなのかも知れない。しかし結果的には、女性の力が眼に見えない形で、力として反映されている。そこには女の男を見る視点がしっかりと存在する。これは「信頼」、いい

かえれば「丸ごと認めてくれる人であること」(註-15)になる。それは『あすなろ白書Ⅱ』274頁と、同じ事になる。この傾向が四通りに発展しているのが、先に述べた『華和家の四姉妹』である。このような「丸ごと認めてくれる人」を要求する傾向が現在の傾向なのだろう。少なくとも、ほぼ同時代の『小早川伸木の恋』(註-7)

以降に、その姿は明確になっている。

また『華和家の四姉妹』では、見つめられていた側の男性が女性側に寄っていかんとする姿が巧みに描かれている。もちろん、オトコの方から手を伸ばし女性を惹こうともするが『華和家の四姉妹』では、藤子をヨーロッパ支社に赴任させようとする元上司の秋山がそれにあたるが、断られる。それは長女である藤子が、病に倒れた父親の面倒を見るためであったが、さえない男の秋元は、自分の親の死を切っ掛けに日本に戻り、藤子の元に戻ることになる。

オナリ神という言葉は柴門の作品では用いられてはいないが、作品中に見る女性達は、誰かに思いを寄せようとするれば、するほどに相手から離れてしまうと言うジレンマに陥っていく。オナリ神、あるいはオナリ神的存在という考え方はもはや死語かも知れないが、遠くから見つめ、想いを込めながら見守るといった女性的生き方は、現実には活きている事の指摘であろう。

柴門ふみは、実に多様な人間模様を描いている。それも、幼児期的人格形成期にまで及ぶ視点を秘めていたりする。



(非婚家族 第4巻 238頁)



(小早川伸木の恋 第1巻 6頁)

『小早川伸木の恋』(註-16) では医局という職場と発達障害(幼児期に実母から虐待を受けたため。特殊な心理を持つ)を持つ妻の間で揺れる男心が描かれている。彼の悩みは、比喩として作品中の「盆栽」で巧みに表現されている。そして彼が惹かれていく女性が盆栽教室の指導員であった作田カナ、もちろん彼女の抱いて



『小早川伸木の恋』第2巻 57頁)

風雷に雷、さかされて
曲がりわった枝は
一見枯木のように見えて、
内々生命力に満ちた葉をつけるわ。

いる悩み、過去はストレートに作品には描かれてこないが、盆栽を通した比喩、巧みな言葉使いを通して彼女の生い立ち



日本を離れるわけにはいきません

父が脳出血の後遺症で介護が必要な体になつてしまったんですよ



妹さんたちには任せられないの……？

から、人間関係が示されてくる。言い換えるならば、盆栽で表現される男を、作田カナが見守り、育むという構図なのである。

悩むのは女だけではない、男も悩むのだ(当たり前なことだけど)。

さらに悩んでいるのは、当たり前なことだけれども当事者だけでもない。その人間に関わりのあるところで悩みは、知らない間に膨張していく。その悩みの根底にあるのは互いの妄想であり、欲望であり、触れられたくない世界の探り合いとなる。それは、お互いの世界を守ろうとすればするほどに否定できなくなっていく。護りたいと思う相手を意識することを「恋」という言葉で表現することが出来るならば、相手は当事者から輝いて見えることになるかも知れない。柴門も、そのことは「小早川伸木の恋第1巻6頁」で指摘している。

(V) 柴門の作品に描かれる「オナリ神的」女性とは

何が自分に「必要なのか、大事なのか」という取捨選択の中で現実の人々は生き続ける。また作中の人物も。マンガという仮想空間の中は、現実が投影されるので当たり前のことかも知れない。また、そこには妄想と利害関係が潜むのである。

作品中に妄想の世界に漬っている人物像が描かれているときがある。それは、現実からの逃避である。妄想からの目覚め、そこには何も仕掛けは要らない。夢から現実に戻るには多大な覚悟が必要となる。現実を受け止めようと試みるとき妄想は大きな壁となる。妄想と現実。その違いが判ったときに女は「オナリ神」的存在になれる。あるいは「なるように眺えられている」、と言えるのかも知れない。そのきっかけは「恋」なのかも知れない。柴門は、恋を巧みに表現している。恋する相手は自分にしか見えないオーラを持った存在である。この『小早川伸木の恋』

シリーズのテーマは孤独である。たとえ家族・家庭を持つが、愛人を持つが心の中に潜む、埋めることの出来ない孤独と言うべき空洞は、単に誰かといっただけでは満たされるわけではないのだ。互いに共有する「寂しさ」あるいは「孤独」を認めあえることによってしか埋めることは出来ない。柴門ふみの『小早川伸木の恋』は、幼児期に



『小早川伸木の恋』第1巻 188頁

実母に虐待され、それ故に彼の愛情を常に確認しようとする妻への対応と、医局という、特殊な人間関係のなかで追い詰められ、悩む小早川伸木の生き方を描かれている。

そんな彼に手を差しのぼすのが盆栽教室の作田カナである。二人を結びつけたモノはたがいの「孤独」さであった。初対面で小早川は作田カナに「動物園に勤めているという。」のちに、何故そんな「嘘をついたの？」



『小早川伸木の恋』第1巻64頁

と、問われ、周囲の人間関係のゴタゴタを動物園に見立て「自分が動物園にいると思えば腹も立たないから」と、答える。カナはそんな伸木に孤独を見るのである。しかし、彼はまだ、自分の孤独に気がついていないのである。



『小早川伸木の恋』第1巻64頁



『小早川伸木の恋』第5巻19頁

小早川の生き方は誠実であると言っているだろう。周囲の人間関係に振り回されないように、する一方妻に振り回されながら生きる彼の姿は、瓶の中の嵐に翻弄されているように見える。彼の生き方ははからずも弁護士の仁志が口になっている。つまり「みんなが傷つけ合わずにうまくやってゆく方法」であったのだ。傷つけないようにすることがかえって傷つけ合う結果となる。小早川が妻と別れることを決めた背景には「みんなが傷つけ合わずにうまくやってゆく」ことが、自分らしく誠実に生きることであったからなのであろう。

オナリ神の世界から少し脱線してきたが、この『小早川伸木の恋』という作品の中には二人のオナリ神的存在がいる。この人達は内面の問題には直接的に関わってこない。社会的な存在であり、社会的な問題を担って来るのである。それは、第二巻で描かれるわがままで医者を信じない老女大熊ヨネであり、もう一人は作品中、余り目立たない存在の添田看護師長、彼女は大学病院の医局のボスである美村教授の愛人でもあった。小早川が大学病院から左遷されそうになったとき、この二人の持つ影の力で小早川は助けられるのである。彼が助けられるのは、彼の生き方にあった。大熊ヨネの場合は前医師会会長の娘、現医師会長の従妹という立場から、医師の腐敗に厳しい存在だった。そして、小早川もそのような、金に汚い権力主義的な存在だと思っていたようだ。しかし、小早川はただ手術のために、患者から100%の信頼を得ようと努めるのみだった。彼のひたむきさが大熊ヨネに伝わり、「腐った医者にならないでくれ」という言葉を残して手術室に入っていく。

そして、無事退院するときに感謝の気持ちとして一鉢の盆栽を贈られる。すでに述べたが、この辺りの心理状況、心の迷いは「盆栽」を媒介として巧みに表現されている。美村教授の胸先三

寸で決まった小早川の職場移動という人事が、大熊ヨネが医師会会長の従妹知ったときに、朝令暮改的にひっくり返ったのだった。医師会会長という権威の前に権威に媚びへつらう者が取る、やむを得ない処置だったのかも知れないが、美村教授には逆う術はなかった。この辺りは、単に作者の設定に過ぎないかも知れない、また著者の深読みなのかも知れないが、妻以外の女性、しかも年上の女に、守られている姿を伺うことができると言える。きっかけはレストランでの一寸したお節介りだったのかも知れない。

「病気のために味覚障害が起こっているのかも知れませんね」と、いう一言がきっかけとなり、さんざんな横暴な患者となるが、小早川の丁寧な対応は、彼女の心を開く。大熊ヨネの行動は、かつて医師会会長だった父への当てつけだったのか



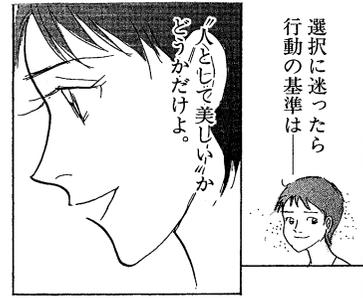
(『小早川伸木の恋』第2巻34頁)



(『小早川伸木の恋』第2巻46頁)

も知れない。医師に対する不信感、身内に対する不信感の中での行動だったのだろう。特別扱いされているわけではないことが、彼女には驚きだったのだ。そこに小早川の医師としての誠意を感じるきっかけがあった。小早川が移動させられると知ったときの彼女の行動は、身勝手なモノだったかも知れないが、小早川を守ることとなった。手術も無事終わり、退院する大熊ヨネからのプレゼントの盆栽は小早川のあるべき姿を作者が象徴させていたのであろう。(『小早川伸木の恋』2巻57頁)

裏切りとは、背信である。背信は、過去の精算へと展開する。それまでの人生を精算することにも通じる。そこには、自分のこれまでを振り返るという行為もある。『小早川伸木の恋』の第1巻から描かれながら役所(やくどころ)の判らなかつた看護師長添田さゆりの過去が、最後になって吹き出して来る。彼女は夫の暴力と、姑のいじめに耐えかねて家を出て、生活が安定したら子供を引き取る予定だったが、離婚裁判で負けたいきさつが『小早川伸木の恋』の第五巻であかされてくる。子供も捨て、20年美村教授のそばで内縁関係のままに、ナースとして彼を見つめ続けてきた。そして、美村の離婚と、年下の元ナースとの再婚、自分の胃がんの発症という中でこれまでの人生を見つめ直したのであった。そこで、添田看護師長は自分の担当医となつた小早川の誠実さに気がつく。



『小早川伸木の恋』第5巻76頁)

小早川の生き方は、恋人の作田カナに言われた「人として、美しいかどうかだけよ」というものであった。そして、添田は20年間が、迷妄の中で過ぎていた事を自覚するのであった。迷妄から醒めたとき、これまでのことは、あたかも憑き物が落ちたかのように感じると添田に語らせている。

ところで、筆者は迷妄、恋、離婚などを問題としたかたつたのではない。

問題としたいところは、「女性の力」という部分である。柴門が本来描こうとしたものと、筆者が問題としたいことは、かなり外れているかも知れないが、女性との、



『小早川伸木の恋』第5巻92頁)

一寸した関係から男が救われると同時に破滅に導かれると言うことを筆者は指摘したいのである。しかも、女性側からの提案(添田看護師長のもつ内部資料)また大熊ヨネとのコネクションを利用し、身の保全を保つという方法を探らないで生きることによって、結果的に守り、育てて貰う形で物語は進行する。

民俗的に言われる「オナリ神」とは異なるがマンガ家、柴門ふみは女性の力によって織り紡がれる世界を描いていると考えられる。それは女性が男性に求める生き方にも通じている。つまり、誠実さであろう。つまり、秋葉宗輔の妻が離婚届を持ってきた際の会話



「生涯、あたしほどあなたを愛し、そして憎んだ女はいないって事だけ覚えておいて。」

(『あすなろ白書』Ⅱ 第3巻263頁)

と、言わせるのはやはり、いつかは分かりあえるという迷妄の中にあっただからであろう。



(『あすなろ白書』Ⅱ 第3巻263頁)

だが、家を出ることを拒否する娘、玲奈の発言にすでに「父を男として見守る小さな『をなり神』」として描かれていると見るのは行きすぎだろうか。

柴門ふみの作品に以上述べたような観点から「オナリ神的性質」を指摘するのは厳しいのかも知れない。しかし、「オナリ神」とは本来男の姉妹、あるいは親族の女性だったことに注目すれば、「オナリ神」となる彼女はその男性を知っていることになる。そして、守ろうとする以上、そこに男性に対する想いが秘められていたことは否定できまい。すでに触れたが『日本書紀』垂仁紀五年の条^(註-17)、狭穂彦、狭穂姫の話を「オナリ神信仰」の存在と示唆している。

この他にも山幸（山佐知毘古）、海幸（海佐知毘古）の話^(註-18)『古事記』鶺鴒草葺不合命の条岩波書店143頁）に見る実母である豊玉毘賣と その妹 玉依毘賣と関わりをも問題としたい。ここで注目しておくべき事は子供の命名は母親、あるいは女性側によってなされていることである。

特定の男の「オナリ神」となった女性は最終的にオトコの妻となるべきものかも知れない。単にその霊力でオトコを見守るだけでなく母から子への霊的な繋がりをも考慮に入れるべきだと考える。現代の日常に潜む諸々の問題を、運命論的に

「たぶん生まれる前から」

と柴門ふみ（Age35・下・229頁）が、朱美に言わせた言葉も暗示に充ちたものとして受け止めるべきものだと考えたい。だが、それには相手を間違えなければと言う条件がついているのである。

註

- 註-1 『定本 與謝野品子全集 第九卷』(詩集一) 講談社、昭和55年
- 註-2 『明星』明治37年9月号に発表されたもので、初出の題は「君死にたまふこと勿れ」、とあるという。また初出では句読点が全くなく、「旅順口包圍軍の中に在る弟を歎きて」と、括弧内に記されている。(関良一校訂・注釈・解説『近代文学注釈大系近代詩』有精堂、昭和38年9月10日発行・昭和39年12月20日再版発行による。)
- 註-3 『をなり神の島』1, 2 東洋文庫227 平凡社 (1973) 1981 ここでは『をなり神の島』1を用いている。
- 註-4 前掲書 13~14頁
- 註-5 日本書紀 監修 高木市之助 他 岩波古典文学大系67 岩波書店 昭和48年 (昭和42年) 590頁
- 註-6 1997年(平成9年)7月12日公開。『もののけ姫』(もののけひめ)は、宮崎駿によるスタジオジブリの長編アニメーション映画作品。
- 註-7 『「絆」の意味世界----柴門ふみに見る人間観・女性像----』『言語・文学・文化』東海学園大学 平成24年
- 註-8 『非婚家族』四巻266頁 小学館 2000~2002年
- 註-9 日中戦争初期に行われた風俗で、出征者に贈って弾丸除けの呪具とした。白木綿の腹巻に千人の男女に依頼して赤糸で一針ずつ縫い止め、これに社寺の守札を縫い籠め、または五銭白銅貨を付し「四銭(死線)を越える」と語呂合せをするなど、いくつか類型があった。多数の念力を合わせ共同体内の個人の危難に対抗する民俗的呪法が国家的事象に応用された一事例で、第二次世界大戦に入って物資不足から衰退した。
- 註-10 柴門ふみ『Age35』上・下 小学館 1995
- 註-11 前掲書 下巻 第14章 「ミサの嘘」
- 註-12 『あすなる白書』全三巻 1992年6月~1992年11月
『あすなる白書Ⅱ』全三巻 1993年8月~1994年4月) 小学館
- 註-13 中島みゆきは「北の国の習い」のなかで、厳しい冬の凍てついた道で男を捨てて去るという比喻で現実重視の?女性を歌っている。歌手: 中島みゆき アルバム『夜を往け』(よるをゆけ)に収録。作曲: 中島みゆき 歌い出し: 離婚の数では日本一だってさ 大きな声じゃ言えないけどね しかも女から口火を切ってひとりぼっちの道を選ぶ)。
- 註-14 『華和家の四姉妹』全五巻 柴門ふみ 講談社 第一巻 2011 (2006) ~五巻 2011 (2008)
- 註-15 柴門ふみ『非婚家族』2000~2002年 小学館 70頁、71頁
- 註-16 柴門ふみ『小早川伸木の恋』(全五巻) 小学館 2006 (2005) 年~2006年
- 註-17 『日本書紀』垂仁紀五年の条(『日本書紀』264頁補注六-五 火中よりのこたへ (590頁)『日本書紀』上、岩波書店昭和四八年(昭和四二年)では、狭穂姫、狭穂彦の話は補注に依ればオナリ神信仰の存在を示唆するとある。
- 註-18 『古事記』鵜草草葺不合命の条 岩波書店143頁)に見る実母である豊玉毘賣とその弟 玉依毘賣と関わりをも問題としたい。ここで注目しておくべき事は子供の命名は母親、あるいは女性側によってなされていることである。
さらに、その子供は「天津日高日子波限建鵜草草葺不合命」は、のちにその姉玉依毘賣を娶ることになる(『古事記』147頁)。